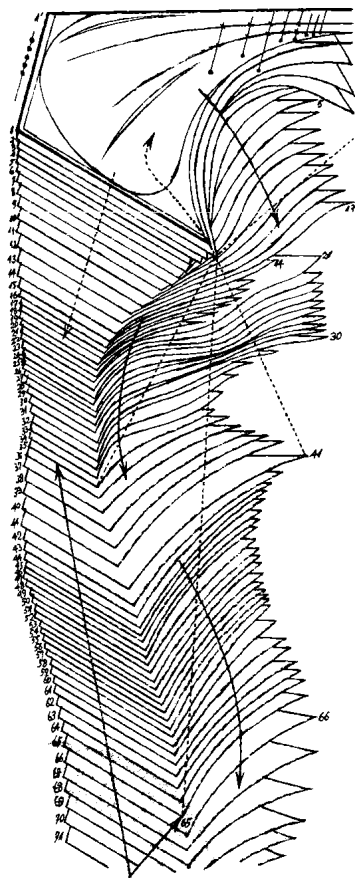


荒正人著作集

第三卷

市民文學論



正人著作集

市民文学論

荒正人著作集 第三卷

1984年4月30日 第1版第1刷発行

著 者	荒 正 人
	© 荒静枝 1984年
発 行 者	菊 地 喜 三 次
印 刷 所	株式会社 厚 徳 社
製 本 所	東 京 美 術 紙 工
発行所	株式会社 三 一 書 房
	東京都千代田区神田駿河台2の9
	電 話 03 (291) 3 1 3 1 ~ 5 番
	振 替 東 京 9 - 8 4 1 6 0 番
	郵便番号 1 0 1

落丁・乱丁本はおとりかえいたします Printed in Japan

I 市民文学論

人類の意志……………	6
人類意識（野間宏）……………	24
アベル殺し……………	32
職業としての文学……………	41
文学は職業になり得るか……………	52
文学者の生活法……………	56
文壇論（一）……………	60
文壇論（二）……………	72
文壇論（三）……………	83
市民文学の推移……………	93

白樺派とその周辺……………113

有島武郎について (一)……………133

有島武郎について (二)……………152

『竹澤先生と云ふ人』……………162

伸子と真知子……………175

菅野省三 (『迷路』について)……………202

漱石・鷗外・龍之介……………220

あとがき……………277

Ⅱ 葉子・伸子・充子——読書ノート

有島武郎 (『或る女』)……………286

宮本百合子 (『伸子』)……………317

山本有三 (『女の一生』)……………346

あとがき……………370

解説……………371

小田切秀雄

荒正人著作集

第三卷／市民文学論

本集に収録するに際して、各作品の漢字は新字体に改め（俗字・宛字は原文のまま）、仮名づかいは引用文以外、現代仮名づかいに統一し（送り仮名は原文のまま）、促音・拗音は小字で表記した。

I 市民文学論

人類の意志

昭和文学史を「ナルプ」の解散した昭和九年で截るならば、前期の抵抗意識を階級とよび、後期のそれを民族と名付けることができるであろう。プロレタリア文学または戦争文学の側に属したひとびとだけがこの意識をもっていたというのではない。属していないひとびとをも夢魔のように苦しめた点で、抵抗意識なのであった。所謂「転向文学」はこの意識の転換が内的強制ではなく、外的強制の結果としてもたらされたところから生れたものである。——階級にせよ、民族にせよ、それは最後の目標ではない。「窄き門」として、それを潜ることによって、永遠の理想に達することが予感されているのだと思う。そのようなきびしい予感を内に秘めていない至上主義があるとすれば、それは、偽れる現実主義か、謬れる理想主義かのいずれかであろう。後期の抵抗意識はこれであった。そのような教訓をも汲み入れたうえで、この最後の目標について考えてみたい。時代的にいえば、昭和文学史の後期、前期を溯って、大正時代になる——『白樺』の時代である。

『暗夜行路』（前篇）のなかで、志賀直哉が時任謙作の日記の形で洩らしている感想をわたくしはよく思いだすのだが、まずそれを引いてみよう。

「——人類の運命が地球の運命に屹度殉死するものとはかぎらない。他の動物は知らない。然し人類

だけは其与へられた運命に反抗しやうとしてゐる。男の仕事に対する、あく事なき本能的な欲望の奥には必ず此盲目的な意志がある。人間の意識は人類の滅亡を認めてゐる。然し此盲目的な意志は実際少しもそれを認めやうとしてゐない。」「人類が滅亡するといふことを吾々は知つてゐる。が、それが吾々の生活を少しも絶望的にしない。それに想ひを潜める時に淋しい堪へられない感じを起すことはある。然しそれは丁度無限を考へて変な淋しい氣持に導かれる、それと変りない感じである。實際吾々は人類の滅亡を認めながら感情的にこれを勘定に入れてゐない。此事實は寧ろ不思議だ。そして吾々は出来るだけの發達をしやうと焦つてゐる。これは結局、吾々は地球の運命に殉死するものではないといふ希望を何処かに持つてゐるからではないか。そしてさう云ふ大な意志が誰にも無意識に働いてゐるからではないか。」

「焚火」や「万曆赤絵」などをそれぞれの時期での屈折点として、私・心境小説の世界に傾斜していった志賀直哉が、人類の滅亡を意識し、それを克服しようとして、日記の形で、文学的には努めたりしていることはいくらか意外でもある。それには、『濁った頭』『大津順吉』『或る男、其姉の死』などをよんで、このひとが青年期には宗教的関心も、社会的関心も、ともどもに有つていたことを知り、意外だと思い、しかしそのあとで、やはり当然だと思ひなおすときの感じにいくらか共通するものがある。そしてキリスト教にせよ、社会主義にせよ、その残響はそれと意識して耳を澄ませば、戦後にかかれた「灰色の月」とか「蝕れた友情」のなかにさえも聞きわけられる。しかし、人類という感覚と意識は全く姿を消してしまつてゐる。おなじ『白樺』のなかからでてきたひとのなかでも里見弴などは終始一貫して人類の意識などには無縁の立場にいた。志賀直哉の場合はたとえ一回ぎりであ

ろうとも、交渉をもっていたことは記憶されていい。時任謙作と人類はもちろん直結することはできない。だが、その中間に、調和的市民とか理想的人間像などといった環をもつてきさえすれば、案外たやすくつなぎとめることができそうである。『暗夜行路』の主人公を通して、ということがいえそうである。だが、『暗夜行路』以後の、いや、以外の系列については、人類は無関係である。人類の手前にいる人間か、さもなければ人類を超えてしまった自然が登場してくる。——宗教的関心にせよ、社会的関心にせよ、そしてまた人類の觀念にせよ、すべての觀念的なもの、したがってまた理想的なものが、抵抗としてたまたかの的になることなく、余りに現実的な現実のなかに陥没してしまうところに、わたくしたちの文学的風土の重要な特質があるとすれば、志賀直哉はその風土のなから生れてきた、一人の代表的日本人とよぶことができるであろう。それは永井荷風とか谷崎潤一郎などの中年以後にしまった日本への回帰などとおなじ血脈を辿ることができる。その意味でも代表的だ。志賀直哉と人類——この断絶感をいたるところ、いたるときに発見するのである。

——昨年秋のこと、新協劇団でソーントン・ワイルダーの『ミスター人類』(原題名 *The Skin of Our Teeth*) の上演されたときのことを思いだす。額縁舞台の約束を頭から無視し、劇の進行を中断させて、俳優、裏方などもでてきて、俳優という人間と、その演じている人物との二重性を分解してみせるといふような実験的手法のしたしみにくかったばかりではなく、おそらくこの芝居の脚本の根本的性格のなかになにか疎遠なものがあつたのではあるまいか。そのために興行的にも、芸術的にも失敗してしまった。たとえば、主人公のアントロポス——かれは外見ではアメリカの鉄道員だが、同時に、『旧約』のなかにでてくる最初の人間・アダムであり、そしてまた「進化論」や、H・G・ウェル

ズの歴史書にでてくる人類の先祖であり、アルファベット、掛算の九九、車輪などの発明者でもある。息子のヘンリーは弟殺しの罪の発覚することを怖れて変名しているカインであるし、女中サビナはギリシャ神話にでてくるサビンの高地から掠奪された美女であったりすること、なるほどこの種の背景的知識の不足も、『ミスター人類』を喜劇として笑い、愉しみ、また考えさせられる芝居として、ひろく迎えることのできなかつた原因をつくってはいたであろう。だが、若しわたくしたちに、人類の観念とよぶに適しいものがなにか別の形ででもつたえられていたならば、自分たちのものとして身近に受け取ることもできたであろう。唐突ないい方をすれば、ここにもまた志賀直哉と人類の距離が存するのである。仏教の因縁話でも、儒教の忠孝でも、また記紀万葉、中世物語、義理人情、花鳥風月——どこをみても人類の観念だけは微塵も見出せない。発見の時代も、発明の時代も、わたくしたちにはなかったのだ。人間を越えて人類を望見することがどうしてできるか。『創世記』やギリシャ神話を幼い頃から聞かされ、世界史や科学物語を十代になってよみ耽ったひとたちと、カチカチ山や桃太郎、そして何冊かの講談本で幼少年時代をもっぱら過し、東西の文学にはしたしんだけれども、人間の物質的基礎の横や縦のつながりに関する知識を取り入れる機会をほとんど恵まれずに成長してしまったひとびと、この両者をひろくふかく距てているもの——それをわたくしは人類の観念だといっているのである。『ミスター人類』のなかにでてくる氷河時代(第一幕)、「人類の六十万年記念祝典」「ノアの方舟」(第二幕)そして世界戦争の終了と平和(第三幕)など、いわば現代の創世記ともいふべきものが、奇怪な、ノンセンスな、そして理解しがたいものとして冷嘲を浴びなければならぬのである。これは芸術ではない！(そして志賀直哉は文学である！)

だがわたくしたちの精神的風土が人類の觀念にたいして不毛の地帯であると断定してしまえば、それはいささか性急にすぎるであろう。志賀直哉が『暗夜行路』のなかで、一回ぎりのものとして触れてきたこの觀念と真正面から取組み、それを文学的發想の場として意識的に設定してきた文学者がいる。武者小路実篤である。志賀にあつては一度きりの出会いであつたものが、武者小路の場合にはあることをしらぬ無限の繰り返しとなつてゐる。終始一貫して發想の足掛りになつてゐる。或る場合には固定觀念にまでなつてゐる。——かれが満五十歳のときかいた『人類の意志に就て』というかなりながいエッセエがある。昭和十年だから、階級から民族への潮目になる年で、人類ということばも禁止語にならうとしてゐるときなのである。

——人間は人類の意志を生かすために生れてきたものであり、人類の意志とは、人類が完全にむかつて成長する意志にほかならぬ、というのがその主旨であつた。このような思想体系、というよりもむしろ素朴な信念にちかいものだが、その要素をなしているものを二三ひろいあげてみよう。第一に人類はこれから成長、發達してゆく存在なのである。これは進化論的オプティミズムといえるであらうか。第二に、人類の横のつながりが意識されてゐる。その前提として、人類のために役立つことによつてのみ意味をもつ個人が設定されてゐる。第三に、人類の完成とむすびついた自己完成が人生の目標として掲げられてゐる。このような人類の意志の結論はつぎのようなものになる。「世界的の平和、しかも勤勉な生活を忘れず、全人類の生命を主にしての協力の世界、誰一人犠牲者を出さずに人類が全体として生長出来る世界、それこそ我等の理想とするに足る世界である。」もちろんこのようない理想論の抽象的空疎性について、階級や民族の足場に立つて反駁を試みることは、ほとんど一挙手一

投足の労であらう。その興味はない。ただ二十六歳で『白樺』を創めたときからほとんど変ることなく、そしてたいして深まることもなく、ひたすら人類の意志を信じて疑わなかった無類の根氣づよい樂天主義に驚嘆するのである。もちろんその間には、トルストイからメーテルリンクに師匠の変ったというような推移もあったのだが、音色は依然としてひとつなのである。

「すべて生長しつゝある人には共通な自惚があり、すべて生長のとまつた人には共通の謙遜がある。

さうして生長しつゝある人には生長のとまつた人の謙遜が不快に思へ、生長のとまつた人には生長しつゝある人の自惚が幼稚に見え、不快に思へる。」(大正二年)——武者小路が人類の成長、発達を信じる動機は結局のところ、人類の一員である自分からでているようにみえる。もちろんこのような確信のはじめからあったわけではなかった。かれは、自然にとつても、人類にとつても、日本にとつても、無意味の、無害、無益の自己を考え、一転して、結婚によって自分の一生が、妻には意味をもつであらう、そして、子供、子孫、家族にとつては無意味ではなくなるであらう、と思いを潜め、結論として、「かく考へ来る時、我は友の爲、家族の爲に生れし甲斐あるものとして我が目に映ず、我が一生はかくて甲斐あるものとして我が目に映ず、我が一生はかくて甲斐あるものとして我が目に映ず、我が一生はかくて甲斐あるものとして我が目に映ず、我が一生はかくて甲斐あるものとして我が目に映じ得るを喜び感謝する。」というのである(「わが一生」明治四十二年)。これはこのひとつとつてのニヒリズムの克服だといえよう。その出発点の甘さについては後で触れるが、武者小路の強味のひとつとして、この上昇感覚を忘れてはならぬであらう。没落貴族の挽歌も、庶民の現実暴露の悲哀も、無理想、無解決も、このひとつの場合をはじめから縁がなかったのである。たとえそういうものがいくらあったにしても、「わが一生」のなかで試みられたような仕方では、足取りかるく乗り越えられたのである。日露戦

争以後、大正時代の第一次世界戦争にかけて、この国の市民社会が全体として上向線を辿っていたということがあるとすれば、武者小路はその先頭に立っていたと見做せないであらうか。そのような現実以上に、頭のなかで空想の上向線を描いていたことはもちろんである。このひとは初期の『白樺』を代表する戦闘的批評家というよりもむしろ、イデオログとして、夏目漱石の『それから』を支持する詳しい論文をかき（『それから』に就て「明治四十三年」、一方ではよんでいない正宗白鳥の『泥人形』を非難し「その折々」その八、明治四十三年）、同時にロダンについて感激をかたり、個人主義の道徳について主張を試みている。世間で、かれとその仲間を嘲笑するものがあれば、いまにみろ、と小学生のような口調でやりかえす。下町の露地にまぎれこんできた山手の元気のいい坊ちゃんを思わせる。庶民につきまとっているじめじめした停滞感や羞恥感、小指の先ほどもない。——進化論的オプティミズムとよんだが、この呼び名は、イギリス市民社会のヴィクトリア朝時代の上昇感覚を前提としている。『白樺』の時代も僅かながら似ている。やがて階級の時代になり、民族の時代になるにしたがって、この成長と発達の思想は発展と飛躍の思想に衣替えをしていった。その場合、断絶が設定されていた。天と地をそのままつなぐ連続観はたれも顧みるものがいなくなった。個人と人類は分離されたまま、次元は一新してしまった。手放しのオプティミズムの信奉者は、或る場合にはドン・キホーテになり、他の場合には節を変えて便乗しなければならなくなった。

「我々のつとめは、如何にすれば自己を人類や自然と結びつけることが出来るかを知ることにある。それには自己を人類や自然の意志のまゝに何処までも生かすより仕方がない。」（大正二年）「自己の内」に人類があるのだ。だから徹底した利己主義者は人類の不幸を我がことのやうに考へるのだ。トルス

トイが人類のことを思ふのは自己のことを思ふに他ならないのだ。其処までゆかない人は人類のことなどを考へる資格のない人だ。さう云ふ人が人類のことを考へたつて適切なことが考へられるわけではない。自己を徹底して幸福にしようと思ふと人類を先づ幸福にしなければならなくなるのだ。其処が自然の意志なのだ。人間の細胞が自己の幸福を真に考へれば人間の幸福まで考へなければならぬのだ。……」(大正二年)「自分の人類的愛と云ふ言葉には二つの意味がある。人類を愛すると云ふ意味と、人類の愛に浸る意味と。さうしてそれは自分にとつては一つのものゝ両面にすぎない。」(大正四年)——武者小路実篤の連帯感の、個人から、自我の欲求からでていることは注意されなくてはならぬ。自己否定の結果として、人類のためにという思想に到達したのではなく、自己肯定の帰結として、自分と人類をつなぎとめようとしたのである。それは自然の意志であるばかりでなく、当然のことながら人類の意志にちがいないのである。知識人につきまといてゐる罪の意識というものが全然ないのである。階級と民族の思想はすくなくともその現象面では、自我を否定してゐたのである。連帯感はその否定という金床のうえで創られたのである。近代の超克という合言葉が行われた。それを思いあわせれば、人類の意志はたしかに鎚をまっている近代思想にほかならなかつた。もちろんその鎚を握っていたひとびとが本当に人類の意志などを卒業してしまつてゐたか、どうか、という設問も成り立つ。だがここでは深入りしない。人類の意志は、家族的連帯感か、国家的連帯感しかしらないひとびとで埋められてゐる風土のなかで、その否定者として自己を大胆につつきだしたところに意味があるのだと思う。そして自己否定ではなく、自己肯定の延長線上にそれを定着させようと希つたところに、たとえば、夏目漱石の「私の個人主義」(大正三年)などの限界を破ることに成功した世代の新しいさが潑瀾として

いるのである。なによりもまずここには、自己の生命力にたいするゆたかな自信がある。ためらいも、疑いも、足踏みもみられない。幼児のように素朴で、美しい自己肯定があるのみである。

——以上、『人類の意志』のなかで主張されている内容が、三十年ちかくも昔の『白樺』時代において、すでに繰り返し叙べつくされていることをみてきた。人類の完成とむすびついた自己完成についてはもはや贅言を要しないであろう。ただし、かれが人類の意志というような形而上の理想を、形而下の世界に求めた「新しき村」については一瞥を要する。「十月革命」の翌年、日向国の一角につくられたこのユートピア社会主義の日本版は、当時すでに科学的社会主義の批判に耐えなかった。興味を覚えるのは、失敗することのあらかじめ判っているにもかかわらず、どうしてもそれを始めないではいられなかったドン・キホーテ風の情熱である。皮肉ではない。人類の意志を信奉していた武者小路実篤の意志を、その幸福への意志を、たかく評価したい。「新しき村」はつぎのような要件をもつ理想社会を目標としたのであった。

——すべての人が、人力で得られる限りにおいて長生きするように十分注意されていること。

——各個人が、出来るだけ自己の趣味、自己の正しき要求、個性を発揮できるように注意されていること。

——すべての人ができるだけ多くの喜びを感じて生きられるように注意されていること。

このような理想社会をめざして「新しき村」の数十名の男女たちは、農耕のほか、印刷、炊事、薪取、運搬、養兔、養鶏、果樹栽培、会計そのほかの仕事に従事し、義務労働六時間のほかは自由な個人の時間をもつことができ、生活の保証されるという仕組みになっていたのである。これは武者小路